

収容したといわれたほどであったが、我々が最後とのことで、合計二〇〇〇名しか集まっていなかった。なかなか帰還船が来ず、その間多少の軽労働はあったが、それ程つらいものではなかった。

ようやくにして「熊野丸」に乗ったのは五月六日のことであった。この「熊野丸」は仮装航空母艦で飛行甲板があった。帰還船に改造され、その収容能力は四〇〇〇名とのことであったが、今回は全員で二〇〇〇名しか乗船しなかったため、船内生活は楽であった。

何よりおいしかったのは日本の白米で、五年振りのこの味は日本を思い出すのに充分であった。それにもましてうれしかったことは、監視のいない自由が得られたことであった。

この船は途中バリックパン沖に一時停船し、数名を収容して一路日本に向い、五月十六日に佐世保に入港し直ちに上陸したが、その際頭からいやというほどDDTをぶっかけられて宿舎に入った。

宿舎にかけてあった戦災被害区域地図を見ると東京のほとんどが焼けており、帰るに家なき有様に見受け

られたので、焼け跡やら会社やら知る限りの所へみんな電報を打ち、無事帰還を知らせたものであった。こうして元気にしておられるのも不思議のような気がしてならない。

## 玉砕の島テニアン戦記

京都府 渡辺 達雄

私は私だけが知っている私の体験したテニアン島での戦闘の様子を書き残したいと思います。でも四十数年の歳月は記憶を薄くし判断のつきにくい事柄もあります。日時、人名などでもし間違っていることがあればお許し下さい。

### 一、出 征

昭和十八年七月名古屋で編成された誉兵団第四十三師団一三五連隊の我々は、昭和十九年五月八日深夜防諜のため靴音を忍ばせるようにして名古屋城天守閣の下の中隊第二部隊の兵舎を後に、名古屋駅より横浜港

着、駆逐艦一隻と輸送船二隻の船団を組んで輸送船「東山丸」に乗り、駆逐艦先導で横浜港を出港しました。

「東山丸」は誠に縁起のいい船で、今まで何回となく輸送任務について僚船が敵潜水艦の魚雷攻撃に沈んで行く中、今日まで無事に任務を遂行して来たと聞きました。目的地が何処であるか、我々兵隊たちは知らぬままに船団は南へ南へと進みます。

途中、小笠原諸島と思うあたりまで海軍の一式陸攻が護衛してくれたが、何時しかそれも見えなくなり、頼みの綱は駆逐艦一隻の護衛です。船団は米潜水艦の魚雷攻撃に備えジグザグに進路を取り、何回か潜水艦警報の警笛を聞きつつも、後で知らされたことですが、目的地サイパン港に着き、上陸しました。

船中では、はじめじめした船倉の生活でシラミがわき、シャツの縫目にはシラミの卵がズラリと並んでくっついていました。航行中には飛魚との競争など時たま心安まる情景などもありましたが、甲板の特設便所には風が吹くと排泄物が飛び散って顔にかかったり、お尻にかかったりして、随分非衛生的でした。その時既に

これらに對してはあきらめに似た感情を持つていたのかも知れません。別に汚いとは強く思わなかったようです。

## 二、サイパン上陸

サイパン島に上陸しました。別の船団で来る途中潜水艦にやられて船を沈められ、海中に一昼夜浮いていて助けられたという兵隊たちが無事命だけは助かって上陸していました。その兵隊たちは武器も何も持たず黒い油にまみれた服を着て見るも哀れなことでありました。

サイパン防衛司令官は海軍の南雲忠一中将。我が營兵団司令官は齋藤義次中将です。

もう少し初めて見た南国サイパンの風景を書きますと、樹々の緑が誠にあざやか、南洋桜は真紅の燃えるような赤さで、まだ戦闘状態に入っていない南国の島サイパンは住んでみたいような平和な島でした。そこでは、空には零戦が舞い、四万といわれた兵隊が陣地構築に汗を流しており戦場の近くを思わしめるものがありました。

第一三五連隊第一大隊の我々は、第二大隊、第三大隊の主力をサイパンに残し、五月三十日命を受けてサイパン港を大発（日本軍が使っていた上陸用舟艇）で出航、雲一つ無い炎天下に僅か対岸五、〇〇〇メートルのサイパン水道を三時間かけてテニアン島南西端のテニアン港に着き、上陸しました。

### 三、テニアン島に転進

サイパン島は内地でも割合知られて有名とされていますが、テニアンを余り知る人はありません。サイパンより対岸五、〇〇〇メートル、サイパン水道を隔てて南西に位置するサイパンより少し小さい島です。サイパンは島の中央近くに海拔約四〇〇メートルのタッポーチョー山があり起伏に富んでいます。テニアンは平坦な飛行場を作るにはもってこいの島で、日本の海軍第二航空艦隊の司令部があり、角田中将がテニアン防衛司令官を兼ねていました。

上陸した私たち中隊は島中央を少し西に寄ったカービー小学校を宿舎にテニアン防衛の任務についたのです。

兵舎の直ぐ南に海軍の第二飛行場があり、毎夜、夜間戦闘機が飛んで訓練をしていました。私たちはカービー小学校を拠点として毎日第三飛行場建設に汗を流しましたが、岩を鶴はしでこついで岩盤に矢を打ち込み穴をあけてハッパをかける。あくまで人力主体の作業になかなか工事は進みませんが戦争の勝利を信じて一生懸命労力を惜しみませんでした。そして滑走路もまだ出来ない六月十一日より、米機動部隊の襲撃が始まったのですが、テニアン上陸後僅か十一日目のことでした。

### 四、米機動部隊の来襲

昭和十九年六月十日の夕刻「明十一日の早朝には米機動部隊がマリアナ諸島全域に来襲、テニアン島も攻撃せられるであろう」ことが情報として報せられ、その対応に多忙を極めました。私は重機関銃分隊に属し応召兵補充兵らの多い中で唯一の現役兵との自負心を持ち、明朝の空襲に備えての準備をいたしました。

重機関銃分隊は四名の銃手、四名の弾薬手に分隊長一名の計九名で一個分隊が編成されます。射手は四番

米津兵長、私は二番で弾丸の装填手です。分隊長杉浦伍長、射手米津兵長、三番小塚上等兵らは中国での戦闘体験がありますが、対空射撃に関しては体験はなかったと思います。私もどのような戦闘にしろ初体験のことで演習とは全く違ったことばかりでした。

初年兵時代、福知山中部第六十三部隊で教育され、名古屋に移って中部二部隊でも教えられて絶対に信頼していた九二式重機関銃を高射にセットして、明朝の敵機襲撃に備えました。甘蔗畑の農道に何の遮蔽もなしに対空射撃の準備をした我々の重機関銃に、十一日の早朝米軍のグラマン戦闘機が襲いかかってきました。

#### 五、米津兵長の命拾い

六月十一日未だ明けやらぬテニアン島上空をズングリとしたグラマン戦闘機が群がって飛んでおります。昨日まで見かけた友軍の飛行機は一機も見当りません。ようやく明けて来た空中に彼我の曳光弾が交錯して美しく感じます。私は夢中で弾丸を込め、米津兵長は機銃掃射して来るグラマン目がけて冷静に打ちまく

り、グラマンは急降下を繰り返し我々の重機を攻撃してきました。

突然、射撃を続けていた米津兵長が頭をかかえひっくり返りました。驚いて抱き起こすと鉄帽に大きな穴が明いています。グラマンの機銃一三ミリ銃弾が打ち抜いた穴で、鉄帽をぬがすと鉄帽と頭をささえる皮の部分との空間に多きな一三ミリ銃弾が煙りを立てておりました。真つ直ぐ鉄帽を打ち抜いていれば、ひとたまりもなく頭を打ち抜かれているのですが、幸運というか奇跡というか、鉄帽を斜めに打ち抜いた弾丸は鉄帽の中をグルリと廻って鉄と皮の部分の間で止まっていたのです。

命拾った米津兵長の強運に皆大喜びで、この鉄帽はどうしても内地に持ち帰るといったものでしたが、何の遮蔽もせずに対空射撃をしたことを反省して直ぐに機関銃を甘蔗畑にかくして、その後は無駄な弾丸を使わぬことにして補充のない装備の消耗を極力避けることに専念しました。

それから後は、彼我の物量の差をいやという程見せ

つけられ、爆撃に危険になったカーヒー小学校を出た中隊は、サバナタバス台地を西へ下りたジャングルに居を移し、敵の上陸に備えて全く補給のない物資の消費を抑えることにしました。

#### 六、米軍のサイパン占領

米機動部隊の来襲三日目より、おびただしい艦船がサイパン水道を埋め尽くしてサイパン上陸に備えているのが分かります。狭いサイパン水道は米軍の艦船で真つ黒で、海面が見えないぐらいで、これは決して大げさな表現ではありません。戦略的にテナアンよりサイパンの方が重要なのでしようか、サイパンに上陸する気配です。空爆に加えて艦砲射撃で攻撃しており、六月十五日よりサイパン上陸を開始したようでその間の波打ち際での彼我の熾烈な戦闘があったことが想像されますが、続々悲観的な情報が入って来ます。

月明けて七月、玉砕に近いサイパンの悲報にいいよ米軍のテナアン上陸に近いものと思われました。サイパン占領を果たした米軍はテナアン向け海岸に重砲陣地を築いてテナアンに向けて間断なく撃ってきまし

た。夜間、ハゴイ飛行場の滑走路に打ち込んだ砲弾は不発弾となって二転三転バウンドするのがきれいに見えました。

七月七日全島を占領されたサイパンでは、防衛司令官南雲中将、我々の軍司令官斎藤中将が共に自決され、残った将兵は米軍に最後の突撃をして玉砕したとの報が入りましたが、生き残った数少ない兵達が敗残兵となり、洞窟にジャングルにかくれて残っていたことは玉砕した何処の島にも共通してあったことでした。

#### 七、米軍のテナアン島上陸

空、海、重砲の四日間間の攻撃の後、七月二十四日、西ハゴイに米軍上陸の報に中隊は迎撃のため拠点サバナタバスのジャングルより島を北上してハゴイを指しましたが、昼間の行動の不可能なことから二十四日夕刻になりました。

中隊は米軍砲撃の中をぬってハゴイ飛行場に近い日の出神社あたりまで進みましたが、敵の集中砲火が激しく、体一つが入るだけのタコツボ壕を各自掘って待避しました。しかし一晩中照明弾を打ち上げて集中砲

火をあびせる米軍にこれから先へは進出不能と、明け方元のサバナタバスのジャングルに後退しました。

#### 八、小塚上等兵の死

敵上陸より四日後島を南下してくる米軍を迎撃するためサバナタバス西に広がる甘蔗畑の防風林に陣地を構えて重機を据え、他に軽機小銃隊と共に敵を待ちました。我々の陣地構築した所は少し低くなった畑地で、西前方一寸小高い丘陵に米軍戦車が姿を現わしその後を自動小銃を持った歩兵部隊が取り囲んで南下して来るのが見えました。満を持していた我々は「撃て」の命令の下に一斉射撃を行った。今まで見えていた歩兵部隊の姿は影も形も見えなくなりました。戦車に機関銃では歯がたためことは分かっておりましたが今度は米津兵長は戦車目がけて必死に撃ちます。その戦車も後の低地に逃げ込んで敵の姿は一つも見えなくなりました。

今までの経験上、同じ場所射撃をつづけていると、きまつて重砲の集中砲火にやられます。我々がトンボと呼んでいた軽飛行機がクルリ反転するとサイパンの

重砲がその下へ集中砲火を浴びせるのです。陣地変換の命令で、後方のサバナタバスの密林に向かって重機の分解搬送で必死に走ります。

私は重機の銃身（三〇キロ）をかついで、空襲によって焼かれて茎のみ交錯している甘蔗畑をサバナタバスの密林目がけて走りました。敵に見られているのはたしかで懸命に走る私の頭を、腹を、足をピュンピュンと銃弾がかすめるのが分かります。焼け残った甘蔗の茎に足を取られて倒れそうです。銃弾にやられるのを今か今かと覚悟しながら走って防風林の陰まで来た時、小銃隊の星野兵長が他の兵隊四、五名と「菊正宗」の一升瓶を持って別れの盃をくみ交わしながら、走って来た我々に「みんなも一杯やっつていざぎよく死にましようや」と言っています。だが私たちの重機関銃はまだ無傷です。こんな所で死んでたまるかとまた銃身をかついで密林目がけて走りました。

ようやくジャングルに入り敵の視界から消えたものと思い銃身を置いて通称ウドン木と呼んでいた大木の下で息を休めました。私たちが分隊の者はみんな無事

で苦しい息使いの顔を見せておりました。ヤレヤレと  
思ったその時、米軍は集中砲火をウドン木あたりに打  
ち込んできました。何処へ待避する間もありません。  
ウドン木の根と根の凹みの間へ小塚上等兵が飛び込ん  
で伏せました。

私は小塚上等兵の上に何処へ行く間もないままに上  
半身乗り出し、伏せてウドン木にしがみついております。  
丁度、小塚上等兵の頭の上に私の腹があるよう  
な状態でしたが、まだ集中砲火は続いています。そこ  
に間断なく砲弾が炸裂しております。ただただ私たち  
は大地にしがみついて体を低くしているだけです。と  
私の腹の下からしほり出すような声で「天皇陛下万歳」  
といっているようです。ハッとして下を見たか見ない  
かさだかではありませんが、一瞬のこと小塚上等兵の  
臀部は砲弾のため左半分ズボンごともしら取られており  
ました。それでもうめき声で「天皇陛下万歳」を唱え  
ています。「お母ちゃんとかおやじ……」とかの言葉は  
ないのでしょいか、その当時としては当然の言葉かも  
知れません。私もこのような時期がきた時、いわなけ

ればと心の隅でチラッと思ったものです。が今体験文  
を書きながらあふれる涙をどうすることもできませ  
ん。

集中砲火はまだ続いております。と一瞬背中に熱い  
衝撃を受けましたが命に別状はないようです。左の背  
中に小さい弾片が入り肋骨を砕いて止まっておりまし  
たが、もし強く入っていれば肋骨を砕いて肺に達し  
ていたと思われます。随分長く感じた集中砲火が止み  
我に還った時、ウドン木の廻りに三十数名いたと思う  
兵の中、無事であったのは杉浦伍長と米津兵長と私の  
三名だけでした。唯一の私たちの武器であった重機関  
銃も砲弾により何処へ行ったか影も形もありませんで  
した。

テニアン島も玉砕目前で、薬も衛生兵もなく傷を治  
療する手だてがありませんでした。幸い負傷をして一  
週間くらい経って弾片は膿と一緒に傷口より出て、そ  
の後一日置き位にマッチ棒位の肋骨のカケラが三本出  
てきました。が命にかかわるような傷ではなく、その後  
一年半の山の生活に耐えられたと思います。そして戦

友たちの亡きがらをそのままに杉浦伍長、米津兵長、私の三名はテニアン島の南端テニアン最後の集結地に決められていたカロリナスを目指しました。この時から私たちは組織的な戦闘の出来ない個々の一兵士になつていたのです。

## 九、敗残兵

生き残つた私たち三名はジャングルを上がりサバナタバス台地の防風林沿いに一旦海岸の斜面に出て、そこから南へ道を取り、ある時は壕に入り、樹の陰にかくれて、空海よりの攻撃を避けつつカロリナスへ急ぎました。途中陽が暮れてカロリナスに入る手前の岩陰に横になり一晩中照明弾と砲弾の炸裂音を聞きながら夜明け前カロリナス台地を横切り東海岸へ出て一つの壕に入りました。

その壕は相当大きな岩盤の壕で部隊名は分かりませんが桑原曹長率いる桑原小隊の兵二〇名程が約同数と思われる民間人と一緒に入つておりました。

私たち三名はその中に加わり桑原曹長の指揮下に入りました。俄か造りの上官部下の關係で今から思えば

信頼關係が全然無かつたように思います。夜もすっかり明けて何時間か過ぎた頃、上のカロリナス台地に敵兵の氣配がしてこの壕も攻撃せられるものと思ひました。兵たちは壕の左側に、民間の人たちは右側に寄つて息をひそめていきますと、シュー、ポーツと発射音がつて火炎放射器を打ち込んできました。熱い、息苦しい、壕の中は石油臭い、真つ黒の煙りが一ぱいで顔を壕の岩肌にくつつけて土中の空気を吸う氣持ちで、皆耐えています。小さな壕であれば一たまりもなく焼かれてしまうのですが、幸い入口が広く奥も深く火炎も届かずに焼け死ぬ者は一人もありません。

一人の兵隊が急に銃を手に何か分からぬことを叫びながら出て行きましたが、間ばつ入れず敵の射撃に崖下へ転がつて行きました。これでもう命運尽きたと覺悟しましたが、時間が過ぎ辺りが静かになり夜を迎えました。

明日になれば大々的に攻撃してくると思われるこの壕を出て崖を下り岩肌の海岸を北にライオン岩の方向に進みました。この時はもう桑原曹長の指揮下を離れ



て私たち三名だけの行動になっていました。「最後の集結地はカロリナス」と決められていてもその場所も分からず、最後の突撃を命令する者もなく、カロリナスに着いたのはひたすら生を求めてここまで来た敗残の兵ばかりであったと残念ながら思わざるを得ません。

このカロリナス海岸一帯は岩肌の大きな断崖になっていて波打際は波の浸食で大きな深い洞窟になっています。かくれ場所としては格好の所ですが、その頃にはもう食糧も水もなくなって、波打際の岩のくぼみにたまった雨水を手ですくって飲んだうまさ、嬉しさは忘れられず正に生き返ったとはこのことと思えました。雑のうに入れていた乾パンも無くなり、底に掌一杯の生米を何食かに分けて食べていました。それもなくなくて岩のくぼみの雨水だけで何日か過ごしました。

この頃が食糧に関しては一番苦しい頃だったと思います。水があれば余り動かなければ幾日か耐えられることも、海水は辛くて飲料水にならぬことも幼稚なこと

とながら体験を通じて知りました。海からは砲艦らしき小さな軍艦が近寄ってきて、日本兵や民間人に投降勧告を始めます。ジャズ音楽をスピーカー一ぱいに鳴らして

「投降すれば命の保証をする、食物も与える煙草もあります」

と独特の日本語で放送するのです。

付近の岩穴には相当数の日本兵がいて洞窟にかくれておりました。米兵に追いつめられて前方岬の断崖から海中に身を投げて死んで行く民間人の話を聞いたのもその頃でした。海、空、陸の三方から攻められ、その上食糧がなく、杉浦伍長と米津兵長は食糧を求めて断崖を上がりカロリナス台地を突き切って行くといいましたが、私は体力の消耗と負傷していることもあり二人と行動を共にすることをあきらめ一人残ることにしました。共に生きて共に戦った唯一の分隊長と射手の古年兵が断崖絶壁の岩場を上がって行くのを夕暮れの壕より何時までも見送っていました。

この時、分かれた二人と二度と逢うことはありません

んでした。もう少し南へもどった壕に友軍がかくした米があるとのうわさにそこへ行ってみることにしました。それをねらっていた兵隊もいて一緒に壕に入りました。かますが破れ米がこぼれてカビ臭くなっていました。嬉しく雑のうに捨てては入れ、捨てては入れして、口にも入れて歓喜の絶頂になっていました。白米と玄米と両方あり生でかじるのならば白米より玄米の方が数段美味なことを知りました。生米を食べるため便の調子が悪くて、何時も泡と一緒に出て来るような便でした。

その頃私のいた壕の上にもう一つ壕があって、海軍の兵隊が一人いてその兵と行動を共にすることになり、カロリナス台地を突破して活を見出すことにしました。その頃には体力は少しは快復して、負傷した傷口にはそこらに生えている草の葉を張っておくと汁が出て葉は直ぐに取れてしまいました。張った時だけは不思議なもので痛みがうすらぐように思いました。一カ月ぐらいいたカロリナス東海岸の洞窟を出て、海軍の兵隊と崖を上がり、満月の月の光を頼りにカ

リナスの台地に出ました。そこには米軍の幕舎があり米兵が歌を唄って騒いでいました。

米軍幕舎を遠廻りに台地を突き抜け、その西の南北に伸びるジャングルの斜面を降りて身をかくす洞窟を探しました。八月も末頃のことその辺りの洞窟に海軍の兵隊五人のグループがいて、隊長格の古川一等兵が教えて呉れました（この頃グループ内の順位は階級よりも統率の力で決まっていたようです）。ここは朝になつたらヤンキーが日本兵を探しにくるから、この洞窟に入つて昼間は隠れよ、とその洞窟は入口が人間の体一つがようやく入るぐらいの穴があり、中に入ると一帖敷き程の広さの岩場があります。中に入つて中から手を伸ばし大きい石で入口の蓋をして、また中から石を積んで入口の石を取つても洞窟が見えないようにして二人は昼間の明るい内は寝ていて米兵の掃討の心配がなくなつたころ、石を除いて穴から出て美味しい空気を腹一杯吸って、海軍のグループと食糧探しに行くのです。

水は洞窟の中の岩を伝わって落ちてくる水のポトン

ポトンという音を聞きながら飯盒に受ける。半日位で一杯になり、飲料水として充分の量が確保できました。その穴の上は米兵の残敵掃討の通り道で、朝になりそこらが明るくなると自動小銃をバンバンと撃ちながら分からぬ英語をしゃべり、アクセントの強い日本語で「出て来い、出て来い」とやって来ます。蓋を取られて手榴弾一個ほうり込まれたら万事休すでおしまいです。

何回か洞窟の上を米兵が通って行きましたが幸いにも見つかることはありませんでした。

カロリナス台地を西へ下りた民家に友軍の備蓄していた米があると聞いて、海軍のグループと探しに行きました。明るい満月の夜、途中、住吉神社は焼けて鳥居のみ残っていたので、苦しい時の神頼みと思いつつ鳥居の前で手を合わせて一日も早く連合艦隊のテナアン奪還を祈って民家の方へ降りて行きました。焼けた民家を探し当て、多分空になった水槽の中だったと思います、焼け残った米があり、雑のうに移していると待ち伏せしていた米兵にバンバンと自動小銃を打ち込

まれ蜘蛛の子を散らすようにジャングルの住家に逃げ帰ってきました。

米軍上陸前、民間の人たちが家庭用に作っていたさつま芋や南瓜など畑に残っているのを失敬したのもその頃で、生きる手段の一つとはいえ今は有難とう御座いましたと御礼申し上げたい気持ちで一杯です。食糧確保に出かけるには何時も危険が背中合わせで、待ち伏せに合って撃たれるのを一番気を付けておりました。

死期を逸した敗残兵は自決用を持っている腰の手榴弾も使う時がありません。この時点でも我々は日本の勝利を信じ連合艦隊が救出に来るのを待っていたのですが、頼みの日本海軍連合艦隊は米軍のマリアナ群島進攻以前マリアナ沖海戦で壊滅し、既に戦闘能力のなかったことを後で知りました。

#### 十、ラソー山に移る

昭和十九年十月末頃、二ヵ月ほど住んでいたカロリナスジャンゲルの洞窟を出て、ラソーの元海軍の壕に米があるらしいことを聞いてラソーに移ることにしま

した。

私と一緒にいた海軍の兵はここにいとカリリナスに残りました。南洋の明るい月の光をたよりに我々六名はカリリナスのジャングルを下り、元南洋興発の甘蔗を運んだトロッコの軌道に沿って北に進み、米兵の襲撃に備えつつ夜明け前、ラソ一のジャングルがここから始まるという地点に着き、よく茂った樹陰に入り姿をかくしました。

そこには熾烈な戦闘に生き残った兵が幾人かいて、「必勝」に対して「信念」の合言葉で相手が日本兵であることを確認、一人でも多くの友軍が生存していることは心強くなったのもしく思ったものでした。

その中に昭和二十一年二月十一日の投降するまでの逃避生活を共にした海軍一曹藤田由紀夫、陸軍兵長中松久雄、同じく兵長阿部正喜、同じく徳弘三千壽らの兵がいて、その後一年半の苦勞を共にしました。現在中松久雄氏は富山に在住されていますが藤田氏は消息が分かりません。高知の徳弘氏と福岡の阿部氏は既に病没されていますが、子供さん達とは今もって濃い交

際が続いています。ラソ一山ではカリリナスのような格好の洞窟はありませんでしたが、密林の茂みに入っていれば身をかくすことができ、そこに危険を感じるのと甘蔗の葉をかぶせてカムフラージュして住みました。

その頃、背中の傷に蠅が止まりウジが湧いてムズムズし、ウジが湧かないようにするのも日課の一つでした。銀蠅は卵を無数に生みつけ、大きな黒い蠅は生みつけたとたんにもうむづむづと動くうじを直接生むことを知りました。あのような大きな蠅は内地では見たことがなく日本にはいないのでしょうか。または衛生的に進んだ日本には繁殖する余地がないのかも知れません。

その頃、チューロの日本民間人捕虜収容所の人達の生活も、戦闘から遠ざかるにつれ安定していったと思われ、昼間は外に出て農園を作り、米軍の指導によって自給自足の生活を行っていたことがジャングルの中よりもうかがい知ることができました。雨が降ると、はだかになり雨に打たれて体の洗濯をするのですが、

シャツやパンツを洗った記憶がありません。白いものをそこらに干していたら発見されるということもあり、かといって煮しめたようなものを身につけていた記憶ありませんが、相当不潔であったことは事実です。

夜になるとそこここにかくれていた兵達が、周りの安全を確認しながら寄ってきます。禪を当てずに出てくる者もいますが、気候が暑いのと大切な衣料ですから…。

海軍の兵に高野という初年兵がいましたが、出て来る時には何時も禪なしで随分立派な息子さんとその恥ずかしくない心意気に何時も感心していたものでした。

米があると聞いていた元海軍の壕を探しあてました。ラソーへ行く道のメリケン松の防風林の下に掘った大きな人工の壕で、たくさんの丸木を入れて天井の支えにしてありました。入口から少し入ったところに日本兵の一体の遺体がつぶせでありましたがもう腐敗して臭気がただよっていました。遺体の奥の広くな

ったところに木で枠を組み、その上に三俵位の米と一俵の押麦とがあり、雑のうに入れてジャングルに持ち帰りました。なくなるとまた取りに行つて、しばらくはその壕の米、麦で食べつないで暮らしたのです。

その頃、米軍はテニアン完全占領を成し遂げ、今までの幕舎から半円を伏せたような兵舎に変わり、私たちの住むジャングルの下の直ぐ近い所にもたくさん建ち、夜になると米兵の騒ぐ声が聞こえ、映画など映して楽しんでる様子がよく分かりました。その近くにはゴミ捨て場があり米兵はゴミを捨てては焼くのですが、焼け残った中にマッチ、脱脂粉乳、メリケン粉、靴、ズボン、シャツなどがあり、それを拾って持ち帰り、今まで着ていた垢にまみれた衣類も変えて生活が豊かになりました。

待ち伏せに逢い犠牲者もあつたようです。ジャングルの生活では背の低い葉の生い茂った木をかき分けて歩く時丁度顔の位置ぐらいの所に小さな蜂が平たい大きな巣を作っていて、それにさわってブンブン追いかけられ、さされるとめっぽう痛く頭をかかえて逃げる

のでした。

米軍はサイパン、テナアン占領後日本本土空襲の拠点にするため昼夜兼行で飛行場を作り始め、夜などテナアン港よりハゴイに通ずる幹線道路を煌煌とライトの帯が続くのでした。テナアンではハゴイに三本、カーヒーに一本の滑走路を機械力に物言わせ、またたぐ間に完成し、十月か十一月頃にはB 29の大群がやってきました。

サイパン、テナアンにB 29が各二五〇機か三〇〇機ぐらいづついたと聞いております。その頃夕方になると四本の滑走路から飛び立ったB 29は上空で編隊を組み北の空へと消えて行きます。サイパンでも同じことがくり返されていたと思われませんが、あくまで想像ながら日本本土空襲であることは間違いないと思います。私達はラソー山からそれを見て歯ざしりして口惜しく思うばかりでありました。

たまたま爆弾の積載量の重さから完全に飛び上がれずに海中に突っ込んでしまうB 29もいて、そんな時はみんな大喜びで何もできない不甲斐無さにうつつぶんを

晴らしていたのでした。本土空襲を終えたB 29は翌朝夜明け頃北の空から一機、二機と帰ってきました。

正確な月日は分からぬまま昭和十九年の年の明けた二十年の一月頃、既に投降していた日本兵がジャンゲルを探して私達に投降勧告を始めたのですが、神経的にまいてって投降して行く兵も相当数あり、結局ラソーに残ったのは八名でした。戦いから遠ざかり、九死に一生を得て今日のある我々の人間の本心として生きていと思ふ心に変わりなく誰を責めるべきでもないと思います。

古川、丸、藤田、中松、徳弘、林、阿部、今井が二つのグループに分かれて生活し、既に気配を感じていた日本の敗戦の不可避なことも、ことさら終局には勝つんだと自分自身に思わせて生きておりました。

テナアンから原爆を積んだB 29が広島、長崎に原爆を投下した悲惨な内地の状況も知る由もありませんでした。

#### 十一、終戦

昭和二十年八月も半ばの頃ジャンゲルにたくさんの

紙がまかれ終戦の詔勅と「戦争は終わったから残存日本兵は山を降りて投降せよ」との投降勧告です。しかし米軍の謀略と思って信じてませんでした。

そのうち海軍の前田少尉(加賀の前田家に関係ある)兵庫県の永田少尉がジャングルに来て、戦争は終わって山にこもっていても意味がない等、神経の疲れるような説得工作がありました。日本の引揚船がゲームからテナン港に入港するからそれを見に行つて日本の敗戦が真実か謀略かを確認することになり、中松兵長と藤田兵曹が代表して行くことになりました。その結果を二人がどのような判断をしても大勢は皆の考えにより決めることを約して二人は引揚船を見に山を下りましたが、日本の敗戦は決定的と思つたようです。空を飛ぶB29を見ても以前まで風防より顔を出していた機関砲も取り外されて見えなくなつており、戦争の終わった証しを見る思ひでした。その頃、我々の住んでいた甘蔗畑を米軍が開墾を始めました。ある朝ガーガーとすごい音がしてキャタピラの音もします。私たちは戦車と勘違いして世帯道具一式を引き下げてジ

ヤングルに飛び込みましたが、途中四、五メートルの距離でブルトナーを運転していた米兵と顔が合い、げんな顔をしていましたが、その後掃討にも来ず戦闘中とは違つた雰囲気でした。我々の住む土地もだんだんと狭くなる感じで、進退についての討論は毎日のようにたたかわして、結局敗戦を認めて涙をのんで投降することに決しました。

## 十二、投 降

七名の内、林氏と丸氏は意見が合わず、その時は仲間をはずれて行きましたが、我々が山を下りた翌日には収容所に来ていて別のきびしい待遇を受けていたようです。

私たち五名の日本兵は既に連絡を受けて途中まで迎えにきていた小型トラックに乗せられて、多分旧日本軍通信所跡と思われる日本兵捕虜収容所に行きました。五名一列横隊になり、収容所長のオーラブソン中尉の簡単な降伏の意志の有無の尋問を受け、降伏の意志のあることを表明して各人自決用手榴弾一個の武装解除を受けて収容所に入りました。時、昭和二十一年

二月十一日。

サバネタバスの戦闘に敗れ、組織的な戦闘能力を失って敗残兵となった昭和十九年八月より一年半の歳月が経っていました。林氏、丸氏など残っていた兵も、その後どんな経路をたどったか分かりませんが、明る日、収容所に来ていた状況から見ても、我々がテニアン最後の投降兵になったのではないかと思われれます。

テニアン捕虜収容所には三〇名ほどの投降兵が収容されていましたが、我々は直ぐに石鹼、手拭、齒ブラシ等日用品を支給されてシャワーを浴びて髭をそってきれいになりました。米兵のお下がりの服を着て（残念ながら背中中にPWの大きな文字がありました）米兵と同じような食事をして煙草をもらい（ラッキーストライク、キャメル、チェスターフィールド等）、今までの生活から思えば快適といえる収容所の生活でした。収容されている人員の少なかつたこともよい待遇を受けた原因の一つであつたと思われれます。米兵と対抗のバレーボールの試合などとして豊かなアメリカの紳士的な待遇を二ヵ月間受けて帰国することになりました。

た。

### 十三、復員

帰国を申し渡されチューロの民間収容所の人たちと一緒に四月七、八日頃と記憶しますが、LST（米軍大型上陸用舟艇）でテニアン港を出港、サイパンからも民間人を受けて沖繩に向いました。生きて帰国できる喜びと捕虜である後めたさが交錯した複雑な気持ちで船に乗りましたが、ただ終戦を聞いた後に投降したという自負心だけが救いであつたと思います。

船底の浅いLSTにゆられて船酔に苦しめられつつ一週間程で沖繩に着き、沖繩の人を下してまた一週間ほど、テニアンを出てから約半月で東京湾の入口、浦賀に着きました。

今四十数年の歳月は忘れていくことが多いのですが、浦賀に上陸した時の感激は無量のものがあつたと思います。思えば「東山丸」で必勝を期して横浜港を出港、数奇の運命をたどって二年、敗戦国日本に今日帰つて参りました。遠くマリアナの島に還らぬ人となつた戦友の無念さを思い、日本に帰つた喜びばかりで



はなかったと思いますが、現実には、出征の時友軍機ばかり飛んでいた上空を米軍機が飛び、MPが我々の帰還手続きを監視して敗戦の事実を見たのでした。

背中にシラミ殺しのDDTを入られたり種々の手続きをふんでいよいよ故郷に帰ります。夜、浦賀の街に出て、ゆで卵が一個十円、食物の高いのに驚きました。

窓に板を打ちつけた鈴なりの列車に乗り込み、東海道線を下り、途中の街が空襲で焼かれ骨ばかりになったビルを見て、これで日本再建はできるのだろうかと危ぶんだものでした。藤田兵曹は茨城県に、中松兵長は富山県に分かれて帰り、私は京都駅で車窓からホームに飛び降りて福岡の阿部兵長、高知の徳弘兵長に別れを告げました。

故郷では葬式も終え、村葬までして頂いた私の生還を、両親、兄弟、親戚等真実どう思ったでしょうか。そして墓地には墓標が立っていて、戦死の地はサイパン、命日は昭和十九年六月十八日、「故陸軍兵長今井幸雄の墓」となっていました（今は養子縁組みのため

渡辺達雄と改名しております）。

背中の傷も医者にかかることなく自然に塞がり、その後、身体に何の支障もありません。人間の身体の強さ、自然の治癒力があるものと自分でも思います。

平成元年九月末、息子の心遣いから今では第二の故郷とも思うテニアン島へ家内同伴で行ってきました。

出発の折、大阪空港で緊張のため便所ばかり行き見送りの子供たちに笑われてしまいました。

日本より三、〇〇〇キロの南の島テニアンは、今は戦争の影すらない平和な島でした。でも波打ち際より見えるカロリナスの海岸の洞窟を見た時は感無量、こみ上げる熱いものを如何ともすることができませんでした。今なおテニアンに眠る幾千の戦友達の霊安かれと折ってペンを置きます。

### 【解説】

テニアン島の簡単な地誌を述べてみる。サイパン島の南約五キロにあって南北約二〇キロ、東西約一〇キロの稍菱形の平坦な島である。両島共に元独逸領で、第一次大戦により日本の委任統治地となったものであ

る。島の面積の約九〇％は開墾され甘蔗畑であり、南洋興発等の精糖工場があり、一万七、〇〇〇余名（うち朝鮮人約二、七〇〇人）の一般邦人が居住していた。

当初テニアン島は、飛行場の適地として、日本海軍航空隊（第一航空艦隊）の第六一戦隊の一部が配置され、本土との中間基地的な役割を果たしていた。いわゆるマリアナ基地の一環であった。しかし、昭和十九年初めまでは陸上部隊の防備は殆ど無く、当然要塞、砲台などの陣地の構築はなされていなかった。

従ってテニアン島の戦備化は極めて手遅れ（マリアナの他島嶼と同じく）で、陸軍兵力の配備は昭和十九年三月以降であった。いふなればそれまでは海軍の裸の基地であり、若し、その頃、米機動部隊、上陸軍が来攻すれば、為す術なく無抵抗の状態で占領されてしまったであろう。

配置されたのは第二十九師団（雷）歩兵第五十連隊（緒方敬志大佐、松本連隊管区）と、第四十三師団（登）歩兵第一三五連隊第一大隊等、陸軍約四、〇〇〇名並びに海軍第五十六警備隊（昭和十九年三月、第六十九

警備隊を改編）等及び航空艦隊を含め約六、七〇〇名が共に防備を固めていた。

陸軍の第五十連隊はロタ島守備を予定していたが、米軍のマリアナ進攻が始まり移動不能のため、緒方大佐がテニアン守備隊長となり、米軍の来攻を迎え撃つこととなった。

六月十一、二日、米軍艦載機によってマリアナ諸島が急襲され、テニアンには午後一時間に亘り約二〇〇機が超低空で飛行場その他の施設に銃爆撃を加え、十三日払暁、空襲とともに戦艦等により艦砲射撃が東西よりなされ、翌日も砲爆撃が加えられた。十五日、テニアン、サイパン両島に砲爆撃すると共に、米軍はサイパン島に上陸した。「次はテニアン」と守備隊も一般邦人も覚悟を決めなければならなかった。

七月二十四日、米上陸部隊は、南部テニアン港に上陸する如く陽動し、日本守備隊は防備に努めこれを撃退した。しかし、米第四海兵師団は手薄の北西海岸に奇襲上陸した。守備隊第五十連隊は急遽北上したが、敵は既に橋頭堡を固め、敵は我軍の迎撃を退けつつ兵

力を増強し、逐次圧迫を強めていった。

我守備隊は中央北面台地を占領し、敵を阻止せんとしたが、二十八日放棄の止むなきに至った。部隊は戦線を整理後退し、島の南部カロリナス台地で持久戦を継続していた。その間、テナアン町ではタコ壺を掘って防御線を敷き白兵斬り込みを行ったが、多くの邦人老幼婦女子は玉碎していった。またジャングル地帯の攻防戦は三十、三十一日と続き壮絶を極め、一般邦人も義勇隊を編成し弾薬運搬、伝令等に活躍した。

最後のカロナス山複郭陣地は猛烈な砲爆撃を受け、緒方守備隊長は、八月二、三日夜、最後の攻撃を行い日本軍の組織的戦闘は終わった。テナアン島は十日間の戦闘後玉碎したのである。

公刊戦史によれば、終戦後投降した日本兵六一名、米軍に収容された民間人約一万二、〇〇〇名、民間人の戦没者約三、五〇〇名である。

陸海軍戦没者は約一万名であるので、本島における戦没者は合計約一万四、〇〇〇名である。なお米軍は三八九名戦死、負傷一、八一六名であったという。

厚生省資料によれば、昭和二十八年二月二十一日以来、同五十年九月までに御遺骨の収集は八、六五三柱であるといわれている。

執筆者渡辺達雄氏は手記にある如く、戦い敗れても降伏せず、当時の状況を知る数少ない、貴い生き証人であり、これは後世に残すべき重要な記録である。